

立教大学ジェンダーフォーラム主催 第78回ジェンダーセッション

「女性像からみる原爆映画：スター・ヒロインと被爆者像の交錯」

日時： 2019年7月29日（月） 18：30～20：00

講師： 片岡佑介（立教大学ジェンダーフォーラム教育研究嘱託、一橋大学博士研究員、至誠館大学非常勤講師）

会場： 池袋キャンパス 14号館 D601教室

第78回ジェンダーセッションは、原子爆弾や被爆者を題材にした映画（以下、原爆映画）の研究をご専門とする片岡佑介氏に、ジェンダーの観点から日本映画の中の被爆者表象についてご報告いただきました。

原爆の慰霊碑や絵画には女性や子どもの形象を採用したものが多く、反面、男性像は忌避される傾向にあります。こうした事例には非戦闘員である女性・子どもの形象により、被爆者を戦争被害の象徴として無垢化する作用を看取できます。特に映画におけるジェンダー化された被爆者表象の構築には、同時代の人気スターや典型的なヒロインのイメージが活用されてきたといえます。例えば、代表的な原爆映画である新藤兼人の『原爆の子』（1952）は、被爆児童の作文集を女教師を主人公とする物語に翻案していますが、その背景には当時の人気ヒロイン像としての「白いブラウスの女教師」の影響がありました。片岡氏は具体的な映像・音声の分析から、女教師の定型表現でもある清廉さの象徴としての「白いブラウス」や郷愁的な「童謡」が原爆映画に取り入れられ、無垢な被害者としての被爆者像を生み出すに至ったと指摘します。その上で、GHQの管轄下で製作された原爆映画における男性兵士としての被爆者像や、『原爆の子』と原著を等しくする原爆映画での女教師像との比較から、映画の形式が原爆や被爆者の意味に及ぼす効果を明快に示されました。

質疑応答では、娯楽の一種である映画においてスターによる美しい被爆者像が（再）生産されることと実際の被爆者への差別との関係などについて多くの質問が寄せられ、活発な議論が交わされました。参加者の皆様とご報告下さった片岡氏に心よりお礼申し上げます。

（立教大学ジェンダーフォーラム事務局・横山美和）



セッションの様子